

## 前登志夫の「村」をめぐる歌について

米田 靖子

コロナ禍の今、これまでになく「村」の生活が見直されつつあるようだ。

前登志夫の歌には「村」が多く歌われている。長い間、村はその共同体としての有りようを存続させるために、新しい考え方の人間を排斥し続けてきた。いわば、その人を異端の者、として。一方、文学は、個人を埋没させないところではか成立しないものであり、文学者は本質的に異端なのである。一人の人間が既存の秩序と摩擦して軋むとき、そこから新しく歌が生まれてくる。

登志夫の生家（住家）は山間の地である吉野の下市町から秋野川という細流に沿ってさかのぼり、峠を越えた標高五〇〇メートルほどの山腹にある。最近そのあたりを私が訪ねた時には、カッコウがしきりに鳴いていた。地理的にはその吉野と対置する側、大阪に近い葛城の山里に住む私は、同じ大和びととして、登志夫の「村をめぐる歌」に絞って、第一歌集から順を追って、その特質を見ていきたいと思う。

夕闇にまぎれて村に近づけば盗賊のごとく

われは華やぐ 『子午線の繭』第一歌集（昭和39年刊）

猫背して村行くわれにひそひそと村びとは

匿す壺の如きを

自分が生まれ育つたふるさとの村に近づくのには、「盗賊のごとく」とうたう人はまずいないだろう。登志夫の「村」に向けられる眼差しは特異である。一首目を収める小題「時間」の一連では、故郷に「帰る」ということと、「村とは何か」ということを自身に問いつつ歌う。詞書においても「人はふたたび、村の向う側から、死者のやうに歩いてこなければならぬ。芳ばしい汗と、世界の問をもつて——」と述べている。いったん作者が村を離れたことには、大きな意味があつたようだ。「芳ばしい汗と、世界の問をもつて」には、若さゆえの気負いがなくもないが、なにかしら逸る気持ちというものが感じられる。

昭和二十、三十年代は、村が元気な時期であつた。登志夫は昭和二十年代の半ば、奈良の前川佐美雄宅に逗留して現代詩を語りあつていった。引用の二首は、その後、父が林業を営んでいる吉野の我が家に帰ってきた時の歌。活気づいている村に、作者はひそかに「夕闇にまぎれ」て、自分の村に帰ってきたのである。「村」に近づくときの昂揚感が、自身を「盗賊のごとくわれは華やぐ」と表現させる。このとき、作

者の目には何が映ってきたのだろうか。それはたとえば二首目の歌から、その片鱗が窺われるかもしれない。

その二首目。村人にとって、この「壺」は村以外の余所者には見せたくないものなのだ。村を村たらしめている古くからの秩序そのものかもしれない。朝星<sup>あさほし</sup>夜星<sup>よほし</sup>をいただきながら働きづくめだった時代、詩をつくる作者は村びとに遊び人と思われたのだろう。そういうものにつつを抜かすこと自体、村の秩序には馴染まないものだったのだ。「若い者が働きもしないで」と噂している前を、作者は猫背となり小さくなくては通って行く、そんなふう<sup>ふう</sup>に自身の姿を描くのである。

鬼一人つくりて村は春の日を涎のごとく睦じきかな  
『縄文紀』第三歌集(昭和52年刊)

はつかなる野火見ゆるかな権力のおよばぬ  
境村と呼びつも

一首目は昭和四十七年作。ここでの鬼はあきらかに追われた者、あるいは追われざるを得なかった者であり、多くの者が是とする範疇を超えてしまった者の寓喩であろう。本来鬼は一匹と数えるが、ここでは一人としている。鬼の向こうには、明らかに人間の姿が重ねられている。異端の者は、共同体には本質的に馴染みにくい。一方、人々の様子を「涎のごとく睦じきかな」とする少し揶揄めいた表現がおもしろい。この「涎」は牛がいつも垂らしているあの涎を思わせ、村という共同体のなかにあるトロンとしたあたたかい停滞感、といったものを連想させる。

二首目、野山の枯草を焼く野火がわずかに見える。野火、

という昔ながらの生活の営みを見ていると、都市を形成する力の外で、村に流れている固有の時間に身を委ねる暮らしを思ったのだろう。野火が見える、という視覚上の表現を通して、村の謎めいた異質の「境」まで読者を運んでくれる。この歌は、野火を日常のものとして山麓に住んでいる私の心を刺激して、さまざまに想像力をかきたててくれる。

また、『縄文期』「あどがき」に、「村のなかにあつて産土からの臍の緒をいつたん截切つてみると、なぜか私には、人間の暮しや人間の生死の意味が一層よく見えるやうになり、内部の村への敬虔な感情が、逆に、あらたに湧き出るのをとどめ難いのであつた」と述べる。いままでに無かった作者自身の内部にある村への「敬虔な感情」である。

登志夫は昭和四十九年(作者四十八歳)金蘭短期大学に教授として招かれる。それらのことがきっかけのように、作者は「村」に対する思いを新たにし、そして深めながら、作歌に励んでいったように思われる。

額縁<sup>がくぶち</sup>のごとくに高く陽を受けし山畑の村は  
つねにいけにへ『鳥獸蟲魚』第五歌集(平成4年刊)

夕闇にとろとろと火が燃えてある高みの村  
よ父を焼くのか

「額縁のごとくに高く陽を受けし山畑の村」は、自身の家のあたりを、一つ谷を隔てて見ているような描き方である。陽を受けた村は一枚の絵に似ているという。そんな風景の村を表すことばは「いけにへ」。このことばは普通、生き物に対して用いられるのだが、山畑の村を「いけにへ」と断ずる

のは、なにやら不穩であり、独特でもある。そういう表し方には、その土地を離れては暮らし得ない者の宿命がこめられているようだ。村のなかに作者が棲んでいることをも含んでの表現なのであろう。さらに言えば、風土のなかで織りなす村びとや家族を「いけにへ」ということばで多く表現するようになっていくことについては、作者の歌に通奏低音のように響いている、ある落魄の思いと関係し合っているようで、私には大変興味深い。

余談だが、前登志夫の住む近くの村から私の住んでいる村に嫁いできた人は、「昔、父を野で火葬した匂いが忘れられない」と言っていたことを思い出す。登志夫のエッセイにもあったとおり、戦後の一時期も村びとは死者を野でそのまま火葬していたようだ。二首目、そういう事実を知れば、肉体がたましいを伴い、とろとろと燃えている火には、一人の人間の終焉の莊嚴まで見えてくるような気さえもしてくる。

草のわた払はむとせり若きらの出でたる村

に花咲き満ちて 『鳥總立』第八歌集(平成15年刊)

この歌は春の歌の一連のなかにあつて、村の光景を淡々とうたっている。春がきて、若者がいなくなっても、花は咲き満ちている。そんな風景のなかで、白い花穂を一面に広げているチガヤだろうか、その絮わたを刈ろうとしている作者は、そこはかとなし喪失感をも払おうとしているかのようだ。村に残されてしまう側の淋しさをうたっていて、歌にこよなくふくらみを感じられる。

産土神すではるかになりにつつ村の翁と

なりゆくわれか 『落人の家』第九歌集(平成19年刊)

ここまでくると、「翁」はたんなる老いたる人というだけではなく、なにか呪力をもっているような老いたる人というだけの翁となりゆく」と、もはや村を厭っているのではない。

「村の翁」への転身の予感には、生まれかわり、生まれかわりして、村を見守っていくのだという、あの世からの視線さえも感じさせるではないか。このとき作者は七十六歳であった。またよく読めば、それぞれの品詞は異なるものの、「に」が三回も現れ、歌に静かな韻律を与えているようだ。この対極にある歌は、本稿の初めに引いた『子午線の繭』に収める「猫背して村行くわれにひそひそと村びとは匿す壺の如きを」であろう。それが今は、「村の翁となりゆく」と歌う。ここには、わがたましいの寄るべきところとしての村、そこへの心寄せがあるように私には感じられるのである。

霰うつ山の檜原をかへり来て夕日の村をはぶるごと見つ 『大空の干瀬』第十歌集(平成21年刊)

霰に打たれても檜はしゃんと立っている。そんなところから帰ってきて、作者は村を見やるのだが、それを「葬はぶるごと見つ」と表して、なにか不思議な視線を感じさせる。異界(あの世)から見ているのだらうか、とさえ思わせる。平成になって、林業は衰退し、山間部から急速に過疎化してきている。そういう村の現状をよく知っている者の、その心情が反映された表現なのかもしれない。

この村はまなく人無くなりゆかむ神のやし  
ろの紅葉もみぢ掃かれて

亡びたる村とはいふないつまでも物語りを  
る死者たちの斜面

やしろの庭は掃き清められてしんとしている。斎庭だ。しかし、作者は、いずれ村には人影がなくなっていくだろうと歌う。人間がみんなどこかへ行ってしまう。何ものかがみんなを連れて行ってしまふのだ。過疎は過疎なのだが、作者はそういう衰退しつつある村落の現象に、一方では魂のあり処を次第に忘れつつある現代のわれわれの姿を重ねようとしているのにちがいない。

二首目。参考までに作者の住む吉野郡下市町の人口は、昭和四十年一三七〇〇人余、この歌が作られた平成二十年頃は七〇〇〇人あまりである。作者は下市町でも山中に住んでいるので、そのあたりではもっと顕著に人は減少している。生きかわり死にかわりするなかで育まれ、伝承されてきた物語を、死者たちが今斜面で語りあっているという。その声は、私にはずいぶん澄んで聞こえる。住む人がいなくなっても、この村は滅び去ってしまった村ではない。村びとが生きた証の物語があり、人間の匂いを宿す風土があるのだ。語ることは、生きていた人を、生きている人へとつなぐという行為でもある。

登志夫の「村」の歌をみてきた。

初期作品には、共同体であるところの「村」に住んで、なお他に紛れることのない個の内面を保持しようという、外界とのせめぎ合いのなから歌われている。作者は故郷を離れ、

都会の空気を吸い込んで、帰郷して山人山人となった。村に積極的にかかわり、村の改革を試みたこともあったようだ。しかし、そうしたことをもし成し得るとすれば、それは異能のなせるわざであって、結果として実を結ぶものとはならなかった。そのことは、時として、うめきとなっていたのだらう。村の共同体の論理というものは硬直していて、その結果、新しい発想の柔軟な生活感覚は受容されにくかったのかもしれない。一方で、登志夫は山や草や鳥や死者たちの声にいいよ深く耳をかたむけ、歌の世界を固な仕方では広げていくことになる。人は今に足りればそこにとどまる。しかし登志夫は自然への畏怖や憧憬、また存在するものの始源の姿をたずねようとか、そういう心を常に保ち続けている。

抽出歌の晩年の登志夫の「村」への思いは、ある意味でいよいよ深まりを見せているようである。大きな視点から概括してみれば、現代社会では、個々人がどう考え、どう振る舞うかということに関心が薄く、精神的なものがおざりにされる傾向にある。そういうふうには、魂の戻る場所について、人々の関心がしだいに薄れてきていることを、登志夫は深く心に留めていたにちがいない。この最晩年（平成二十年四月死去）の歌々は、死者の心を問近にすることによって、現代人の魂の戻る場所を描こうとするところから生まれてきているように思われる。

前登志夫の「村をめぐる歌」は、自身の村を独自の眼差しで描き続け、最晩年まで瑞々しい。